

2002年度春季大会の告示

1. 期 日：2002年5月22日（水）～24日（金）

2. 会 場：大宮ソニックシティ
（さいたま市桜木町1-7-5
ソニックシティビル）

3. 研究発表

一般の発表は原則としてポスターとするが、申込状況に応じて一部口頭発表を実施する（下記「一般発表セッションの方法」参照）。その他に、7件の専門分科会を実施する。専門分科会では十分な時間をかけた口頭発表を行う。専門分科会のテーマは公募され、講演企画委員会の審議によって決定された（下記「講演申込要領」参照）。

講演申込方法については「講演申込要領」（下記）参照。

4. シンポジウム

大会第2日（5月23日）に開催予定。テーマは「21

世紀の極域科学—今なぜ南極観測なのか—」。

5. 大会参加費、懇親会費

郵便振込による前納または当日受付による。大会当日は受付が混雑しますので、極力前納するようお願いいたします。

金額は以下の通り。

大会参加費：

	一般会員	学生会員	会員外
前納	2,000円	1,000円	-----
当日払	3,000円	2,000円	3,000円

懇親会費：

	一般会員	学生会員	会員外
前納	5,500円	4,500円	-----
当日払	6,000円	5,000円	6,000円

なお懇親会は大会第2日（5月23日）夕刻に開催予定。

講演申込要領

1. 発表の種類

- (1) 上記の通り、一般発表（ポスター及び口頭）と専門分科会における口頭発表の2種類となる。
- (2) 専門分科会へ申し込まれた講演は、コンピーナーの判断によって、専門分科会への採否が決定される。専門分科会に採用されなかった講演は、原則として一般発表へ変更となる。ただし、申込の時点で申し出れば（申込用紙に選択欄あり）、不採用時に講演をキャンセルすることもできる。
- (3) 一般発表は原則としてポスターとするが、会場の制約からポスターの掲示可能数には上限があることから、講演の一部を口頭発表によって行うこととする。講演の方法（ポスター/口頭）については講演申込時に選択できるが、必ずしも希望通りになるという保証はない。

2. 発表件数の制限

一般発表については、1講演者について異なるテーマのもの2件以内とする。この制限に抵触する申込があった場合や専門分科会からの種目変更によって制限に抵触することになった場合には、講演企画委員会が適切に処置する。

3. 申込方法

- (1) 一般発表への申込
 - ・本号末の申込用紙に記入し、予稿集原稿を添えて講演企画委員会に送付する。
 - ・申込期限：2002年2月26日（火）必着
 - ・送付先：
 - 〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1
 - 気象研究所予報研究部内
 - 講演企画委員会（永戸久喜）
 - (2) 専門分科会への申込
 - ・本号末の申込用紙に記入し、予稿集原稿を添えて講演企画委員会に、また両者のコピーを各分科会の受付に送付する（送付先は下記を参照）。
 - ・申込期限：2002年2月19日（火）必着
 - ・原本送付先：
 - 〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1
 - 気象研究所予報研究部内
 - 講演企画委員会（永戸久喜）
 - ・コピー送付先：
- ①GPS 気象学
- 〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1
 - 気象研究所予報研究部

瀬古 弘

②新しい気象観測方法と未来の天気予報

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科
4号館地球物理
余田成男

③ウィンドプロファイラは如何に進歩し、発展するの
か

〒100-8122 東京都千代田区大手町1-3-4
気象庁観測部高層気象観測室
石原正仁

④気象学における地球環境問題

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学地球水循環研究センター
気付 環境学研究科
田中 浩

⑤亜熱帯・熱帯東アジアの降水活動と陸面過程

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学地球水循環研究センター
上田 博

⑥夏の天候と東アジアの循環場

〒100-8122 東京都千代田区大手町1-3-4
気象庁気候・海洋気象部気候情報課
渡辺典昭

⑦熱帯対流圏界面・遷移層

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄
京都大学宙空電波科学研究センター
塩谷雅人

4. その他

- (1) 最近、講演申込用紙に書かれたタイトルや著者名が予稿集原稿に書かれたものと異なる申込が多く、講演予稿集編集作業に支障をきたしています。講演申込用紙記入の際には上記の点に十分にご注意下さい。
- (2) 申込まれた予稿の内容が、(ア)気象学とは全く無関係である、(イ)極めて非合理的・非論理的である、(ウ)他者を誹謗中傷する部分がある、等の理由により、講演を認めることが適当でないと講演企画委員会が判断した場合には、講演を認めないことがあります。
- (3) 大会プログラムは「天気」4月号及び日本気象学会のホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/msj/>) に掲載されます。ホームページへの掲載は締切から約2週間後までに行われる予定ですので、講演申込者は申込が受理されているかどうかなどの確認に利用して下さい。

一般発表セッションの方法

1. 一般発表は原則として、大会期間中の各日の午前中に一般口頭発表及びポスターの概要紹介を行い、その後、午後にかけてポスター発表を行う予定である。
2. ポスター発表の概要紹介の持ち時間は30秒で、OHPを用いることができる。
3. 口頭発表は一件(講演・質疑あわせて) 5分程度とし、ポスターの概要紹介の前に行う。発表会場はキーワードに基づいて割り振るが、細かなセッション分けは行わない。
4. ポスター発表の時間は1時間半程度とする。ポスター発表中は専門分科会は行われぬ。各講演者がポスターの前にいなければならない時間(拘束時間)を30分間設定する。
5. ポスターの掲示・撤去は、講演者自身が行う。掲示にあたって画鋲とセロテープが使用できる。それらは講演者各自が用意すること。
6. ポスターには講演題目・講演者名を明記しておくこと。
7. 掲示板は縦210cm×横90cm程度である。なおポスターは大きな紙1枚に書く必要はなく、小さい紙に分けて書いたものを当日並べても良い。

講演における機器の使用について

1. 専門分科会ではOHP・VHSビデオ・スライド・PCプロジェクターが使用できる。
2. 会場の構造上、VHSビデオは見えにくい場合がある。
3. スライド機器の操作は発表者自身(またはその協力者)にお願いする場合がある。

4. PC プロジェクターの使用を希望する場合は以下の点を予め了承すること。
 - ・パソコンは各自で持参すること。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備し、パソコンは用意しない
 - ・突然の故障や接続ができないなどのトラブルが発生した場合も考慮して、最低限の発表が出来るだけのOHPシートも用意しておくこと
5. 一般口頭発表及びポスター発表の概要紹介についてはOHPのみが使用できる。
6. 講演申込用紙に機器使用に関する記載が無い場合はOHPのみを使用するものとみなす。
7. 機器使用の申込は講演申込時にのみ受け付ける。それ以降の変更や追加は一切認めない。
8. 講演申込用紙の「使用機器」欄に記載されている以外の機器を使用したい場合やその他の要望がある場合は、機器や物品の名称及びその使用方法をなるべく具体的に欄外に記入すること。ただし会場の都合などにより、要望が全て受け入れられる保証は無い。

専門分科会の概要紹介

2002年春季大会では下記の通り、7件の専門分科会が開かれます。

①テーマ：GPS 気象学

趣旨：GPS 気象学は、GPS 衛星が発射するマイクロ波の地球大気による遅延効果から水蒸気、気温等の情報を推定し、これを気象学的に利用することを目的とする。現在の主な観測手法は、地上に設置した受信機とGPS衛星間の水蒸気量等を観測する“地上型”と低軌道衛星や山岳等に設置した受信機を用いて気温、水蒸気のプロファイルを推定する“掩蔽法”の2つに大別される。本分科会では、“地上型”、“掩蔽法”の最近の観測や解析等の研究について発表する。また、近年漸く盛んになりつつある、GPS 気象データの数値予報や、メソ気象等の解析への応用の研究についても発表を行う。これらをとおして、日本におけるGPS気象学の現状の総括と将来の方向性について議論を深める。

コンピーナー：青梨和正，瀬古 弘，小司禎教（気象研究所予報研究部）

②テーマ：新しい気象観測方法と未来の天気予報

趣旨：近年、エレクトロニクス・通信技術の革新を踏まえて、新しい気象観測方法が幾つも提案されている。無人の小型飛行機やゾンデ、ブイ、ロケットなどを組み合わせた現場観測、各種衛星や地上からのレーダー、分光機器などによる遠隔観測、等々である。これらは、期間や場所を限定した科学目的の特別観測に用いられるが、数値天気予報の初期値を作るデータ同化手法の飛躍的高度化により、日々の天気予報にも現業的に用いられる可能性が出てきた。

また、カオス理論に基づけば、大きな予報誤差をも

たらず領域を事前に特定できるようになる。台風や寒波の吹き出しなどインパクトのある大気現象に対して、新しい観測手法でそのような領域に目標を絞った機動的観測を行えば、それらの予報精度をずっと高めることも可能となろう。現在、WMOが中心となって「北半球規模での観測システム研究と予測可能性実験」(THORPEX)を計画している。このような成果を踏まえて、未来には大気観測やデータ通信のシステムが再構築されることになろう。

天気予報に結び付く新しい観測方法、および、新たなデータに基づく未来の天気予報の有り様について、開発の現状と将来展望とを何人かに語っていただき、関連する一般講演をまじえて総合的な議論をする。

コンピーナー：露木 義(気象庁数値予報課)，中澤哲夫(気象研究所台風研究部)，余田成男(京都大学大学院理学研究科)

③テーマ：ウィンドプロファイラは如何に進歩し、発展するのか

趣旨：1970年代に主に中層大気を観測対象として登場した大気レーダーは、1980年代には対流圏の風を観測対象とする「ウィンドプロファイラ」として気象の研究分野で活発に利用されることとなり、1990年代には各国の気象機関がラジオゾンデを補完・代替することを念頭に業務実験を行うようになった。現在国内では京都大学MUレーダーを筆頭に可搬型境界層レーダーまでが、大気波動・メソ気象・境界層・雲物理などの研究分野で広く利用されており、2001年4月には気象庁が25台のウィンドプロファイラから成る高層風観測網の業務的な運用を開始し、京都大学赤道大気レーダーなどの新しい大気レーダーも完成した。

こうした状況にあるウィンドプロファイラに関して、これまでの理論・基礎研究や応用研究を振り返るとともに、さらに進化するであろう研究的利用や今後期待される業務的利用を対象に、それらが最適に発展するために必要な検討課題や目標について議論する。これによって、ウィンドプロファイラに関係する研究者、実務者、製作者さらに潜在的利用者の間で情報の交換や共有化を促進し、この分野がさらに発展することをめざす。

この専門分科会では、京都大学宙空電波科学研究センターの深尾昌一郎センター長による招待講演を予定している。

コンピーナー：石原正仁（気象庁高層気象観測室）、橋口浩之（京都大学宙空電波科学研究センター）

④テーマ：気象学における地球環境問題

趣旨：平成12年5月の日本気象学会理事会において、「地球環境問題委員会」を新しく理事会のなかに置くことが決まった。地球環境問題に対する社会の関心は高く、その内容は自然科学から工学、社会・人文科学の関連分野まで広範囲に亘っているが、気象学会としては、人間活動に関わる地球環境変動の実態と将来への影響などに関して気象学・気候学の立場から社会に正しく伝えていくことが重要であると考えている。

地球環境問題委員会は社会に向けた諸活動に専念するという原則的立場をとることを条件としている。それにもかかわらず、地球環境問題に向けてどのような研究が行われているか、地球環境問題をどのような認識のもとに進めていくか、などを気象学会の内部で発表し議論する場をもつことは、社会的活動を行うためにも避けて通れないプロセスであると考えている。

今回は、地球温暖化と気候変動、大気組成の変化、オゾン層破壊、炭素循環、気候変動と生態系などについて、過去と現在の状況、将来への予測と問題点、自然変動と人為的影響の相互作用などの視点から議論する。特に、若い研究者の参加を期待する。

コンピーナー：田中 浩（名古屋大学大学院環境学研究所）

⑤テーマ：亜熱帯・熱帯東アジアの降水活動と陸面過程

趣旨：国際共同研究「アジアモンスーン地域におけるエネルギー・水循環観測（GEWEX Asian Monsoon Experiment；GAME）」における集中観測が終了し、

特に HUBEX 領域と GAME-T 領域においては降水活動と陸面過程に関する個々の解析結果や数値実験結果が出揃い、陸面過程と降水現象の関係を議論できる段階にある。しかし、GAME の各観測領域の特徴がわかってくる一方で、観測領域間の関連について考えるという意識は高まっておらず、新しく立ち上がりつつある観測プロジェクトとの関連についてサイエンスとしての意義付けを急ぐ時期に来ている。GAME の観測領域のなかで降水量の多い HUBEX 領域と GAME-T 領域を対象として、降水活動と陸面過程に関する研究成果を両観測領域の比較や関連性、そして夏のアジアモンスーンの季節進行と地域的な降水過程との関係を中心に議論したい。また、両領域の周辺地域での関連する観測結果の報告を得て、亜熱帯・熱帯東アジアの降水活動と陸面過程に関する GAME データの利用方法、GAME 観測の継承方法、および新たに始まりつつある研究の方向性についても情報交換を行いたい。観測・解析結果をもとに、亜熱帯・熱帯東アジアの降水活動と陸面過程の研究の方向性について提言したい研究者の積極的な参加を期待する。

コンピーナー：上田 博（名古屋大学地球水循環研究所）、松本 淳（東京大学大学院理学系研究科）

⑥テーマ：夏の天候と東アジアの循環場

趣旨：最近の日本の夏の天候は、エルニーニョ現象が発生していたが高温となった97年、高気圧の北へ張り出しが顕著だった98年、前線が北へ偏った2001年など、平年から隔たった天候が目立つ。

日本の夏の天候と循環場との関係については、フィリピン付近の対流活動と日本付近の亜熱帯高気圧の関係についての研究成果に加え、近年、アジアモンスーンと夏の循環、中緯度のエネルギー伝播との夏の循環、十数年スケールの変動や振幅変調などの研究が盛んに行われている。

以上のような状況をふまえ、本分科会では、最近の夏の天候と循環場の特徴について、最新の知見に基づき分析し、その解明を目指す。

コンピーナー：渡辺典昭、前田修平、八木勝昌（気象庁気候情報課）

⑦テーマ：熱帯対流圏界面・遷移層

趣旨：近年、熱帯域の対流圏界面を（たとえば温度極小のように）ある高さで決まるような面ではなく、数 km の厚みを持った対流圏から成層圏への遷移領域

として捉える考え方が提出されている。この領域は、対流圏に起源をもつ大気微量成分の成層圏への流入経路にあたっており、成層圏における微量成分の存在量をコントロールしている。なかでも水蒸気は最近その増加トレンドが注目されており、これが下部成層圏における寒冷化、オゾンの減少に影響を与えていることが示唆されている。このような背景のもとで、この領域においては、力学、光化学、放射などさまざまな観

点から研究が活発におこなわれてきているが、飽和水蒸気量の気温依存性により、水蒸気がそれらの研究の重要な鍵のひとつとなっている。ここでは、この領域に関する最近の研究を紹介する講演をおこなうとともに、熱帯上部対流圏から下部成層圏にかけての関連した大気現象に関する一般講演をおこなう。

コンピーナー：塩谷雅人（京都大学宙空電波科学研究センター）、長谷部文雄（茨城大学理学部）

講演予稿集原稿の書き方

大会発表を申し込む会員は、以下の要領で予稿集原稿を作成し、本号末の申込用紙とともに講演企画委員会へ送付して下さい。

1. 原稿枚数：1件1枚
2. 用紙：A4判の白紙を使用する。その他の規格の用紙を使用しないこと。
3. 記入方法：A4用紙に直接出力するか、別紙に作成した文書・図表を用紙に糊付けする。原稿はダイレクト製版される。
4. 図および表：写真や図表には折り目が入らないようにする。階調のある写真や図は、階調度が落ちる場合がある。
5. インク：ワードプロセッサ、手書きの場合とも、墨または濃い黒色インクを使う。黒以外の色のインクや鉛筆を使用しないこと。
6. 配置（右図参照）：記載範囲は縦250 mm×横170 mm以内とし、上部には20 mmの余白をとる。最上段に標題、その下に著者と所属を書き、本文をその下につける。著者が複数の場合には講演者の左肩に*をつける。標題から本文までの間隔は20～25 mmとする。本文はなるべく2段組（左半

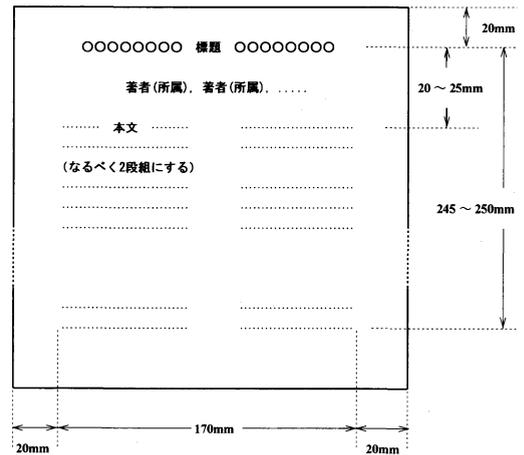


図 A4判用紙による予稿原稿の作成要領

- 分→右半分)にする。
7. 著作権：予稿集に掲載された文章および図表の著作権は日本気象学会に帰属する。
8. 送付：予稿集原稿を細かくおりたたまないこと（2つ折りは可）。送付先・送付期限は「講演申込要領」（939ページ）参照。

非会員の大会講演について

気象学会会員でない方は原則として大会講演を行うことは出来ません。しかしながら、短期滞在の外国人や他分野の研究者が気象学会において講演を行う場合を考慮して、講演企画委員会では以下の規定を満たすものに限って非会員が大会講演を行うことを認めています。

1. 共著者の中に会員が含まれていれば、非会員の講演を認める。

2. 上記規定を明確にするために、講演申込用紙に講演者の会員番号（非会員は会員である共著者の会員番号）の記入を義務づける。
3. ただし専門分科会に関しては、各コンピーナーの判断にゆだねる。

なお、講演企画委員会としてはこれまでと同様、継続的に大会発表を行いたい人には会員になって頂くよう望みます。

研究会活動への支援について

講演企画委員会では、大会期間中またはその直前・直後に会員が自主的に運営する研究会活動に対し、一般の会員が自由に参加できることを条件として、可能な支援をします。具体的には、大会プログラムへの掲載、会場・機器の手配、時間の調整などが考えられます。支援を希望する方は、下記の事項を明記の上、講演企画委員会へ申し込んで下さい。

申込先・申込期限：大会の一般講演と同じ

- 記入事項：1. 会の名称とテーマ
2. 代表者の連絡先
3. 希望日時・開催場所
4. 予想参加人数
5. 希望する支援内容

なお、大会会場の使用を希望する場合は、準備の都合上、上記申込期限を厳守して下さい。期限を過ぎてもの申込は一切受け付けません。